建長寺蔵『龍王殿再建日記』に見る江戸期作庭の実証的研究

A STUDY ON THE MODIFICATION PROCESSES OF KENCHO-JI GARDEN OF THE EDO ERA

—Through the record titled “the Diary of Renovation of *Ryuo-den*”

三浦彩子*
Ayako MIURA

This paper describes the analysis of the renovation of the *Kencho-ji* garden during the *Horeki*-era (1751-1756) mainly based on the record titled “the diary of renovation of *Ryuo-den*.” Followings are the new aspects of the renovations found through the analysis.

1. The partial renovation of the pond and vegetation were conducted two years before the construction of the *hojo* building.
2. Those renovations were done under the direction of the principal builder named “*Sanzaemon*.”
3. The principal builder were in charge of designing and constructing both building and garden instead of separate manner.

Keywords: Construction of the garden, Kamakura, Land construction, Edo era, Record of rebuilding of the temple, Study of the timetable
作庭, 鎌倉, 敷地造成, 江戸時代, 再建記録, 工程分析

1 はじめに

鎌倉市山ノ内位置する巨福山建長寺は、鎌倉幕府の五代執権・北条時頼の命により建長5年(1253)に創建された臨済宗寺院である。当寺は蘭溪道隆禅師を開山に迎えて開創され、わが国では最も初期の宋朝禅院の規則に遵法した本格的禅宗寺院として知られる。その伽藍は禅宗寺院の典型的な配置に従い、山門、仏殿、法堂、方丈が縦列に並ぶ様相を呈し、さらに谷奥に広がった支谷には塔頭寺院を擁して、鎌倉特有の谷戸地形に順応した景観を特徴としている。現在の方丈の北面には、約600坪の池泉回遊式庭園¹⁾があるが、鎌倉時代末期の庭園の様子は「元弘指図」²⁾によって、広大な苑池が数棟の建築物によって取り囲まれた様子が知られている。しかし、このような複合的形態から、現在のような広縁付六間取方丈に付属する小規模庭園に改造された経緯については、具体的な論証資料が不足しているため、これまで詳細にされることはなかった。このため、庭園改造の推定年代は、一般に、寛永年間に行われた方丈と山門の再建をはじめとした江戸時代初期における建長寺再興の時期とされてきた³⁾。こうした従来の評価に対し、本論文では寺蔵文書『龍王殿再建日記』(以下、『再建日記』と略記)の記述に注目し、宝暦年間に行われた庭園改築の具体的な内容を明らかにすることとした。『再建日記』は、寛延元年(1751)から宝暦6年(1756)にかけ

て行われた方丈の再建事業に関する記録であり、その内容は造営方針の議決から土地の検分、資金や資材の調達、建築工事の工程、庭園の地業等におよぶ総括的な作業の覚書である。

本論文は、『再建日記』に記述されている個々の作業記録を工程表として再整理し、再建事業全体の中で庭園改築がどのように位置付けられていたのかを解明し、さらに庭園改築に大工職の関与が見られた点に着目し、建築と庭園の造営段階における関連性を実証的に解明するものである。また、本庭の庭園史学上の意匠論に基づく評価は「現在の地割などに表はれてゐる池泉形式の如きは、大体に江戸初期と云うべきであらう。」⁴⁾等とするものであるが、これをより工学的な見地から実証した研究はこれまでに行われていない。従って、本論文は、上記の目的に加えて、現在の池泉と「元弘指図」に描かれた苑池との関係を明らかにするものである。

2 建長寺に関する従来の研究

建長寺に関する建築史あるいは庭園史に基づく研究については、いくつかの先例がある。建築史研究については、太田博太郎による中世五山建築の文献的基礎研究をはじめとして、これまでに幾多の先行研究がある。「元弘指図」に基づく伽藍配置の設計計画については櫻井敏雄「建長寺伽藍の設計計画について、元弘元年の指図を

* 独立行政法人国立科学博物館理工学第四研究室
技術補佐員・工修

Assistant Researcher, Dept. of Science & Engineering, National Science Museum,
M. Eng.

中心として⁵⁾があるが、伽藍後方の方丈とその苑池については述べられていない。また、昭和18年(1943)に京都三昧院より移築された現在の方丈について考察した論文としては、武内正和「建長寺方丈について」⁶⁾があり、実測調査に基づいて現方丈の復元的考察がなされている。このほか、伽藍配置の変遷については、近年行われた建長寺の発掘調査に併せて鎌倉市教育委員会編著による「建長寺境内遺跡・昭和61年報告」などが公刊されている⁷⁾。

こうした従来の研究においてしばしば引用される「元弘指図」により、鎌倉時代末期の伽藍と庭園の基本的配置が知られる。

指図には仏殿前の花頭窓付の廻廊で囲まれた中庭と、伽藍後方部の広大な苑池が描かれている⁸⁾。この苑池は蘸碧池と呼ばれ⁹⁾、池を取り囲むように、南側に「得月楼」と方丈「大客殿」、池をへだてた西北には「観音殿」が描かれている。「大客殿」は池に廊を張り出し、池に面して蔀戸を吊った寝殿造風の住宅建築であるのに対し、他の二棟は二階楼閣形式であった様子が見られる¹⁰⁾。その他に、上流から苑池へと流下する水路の途中と観音殿前の細流の二箇所反橋が描かれた。このように庭園一帯は、「池をめぐる低平な方丈と楼閣形式の堂が隣接あるいは池をへだてて高低相呼応して瀟洒な景観を構成」¹¹⁾していたと考えられている。しかし、室町時代末期の寺勢の衰退以降、池辺の建築群は消滅し、池泉地割を含め庭園の全体意匠は大きく変化している。寛永18年(1641)に再建された方丈は、聴松軒と呼ばれたが¹²⁾、元禄16年(1703)11月22.23両日の元禄大地震による被害により傾損した¹³⁾。それから半世紀後の宝暦6年(1756)に新方丈として龍王殿が上棟され、傾いた旧方丈は隣接する庫裡として移築された。龍王殿は大正12年(1923)9月の関東大震災で倒壊したため現存せず、昭和18年(1943)に京都の般舟三昧院から新たに方丈が移築されて現在に至っている。以上のほか、鎌倉社寺全般における近世の復興に関しては、関口欣也の研究に代表されるが、同氏によって、龍王殿再建の経緯と造営形態の概要が述べられている¹⁴⁾。

一方、庭園史上の評価の根幹となるのは、重森三玲¹⁵⁾による昭和13年(1938)の実測調査である。池底部の調査が行われた際に、鎌倉時代の池泉池底の構造が残っていることが確認され、これにより本庭は鎌倉時代の庭園遺構としても価値があるとされている¹⁶⁾。

庭園の改築経緯については、寛永年中(1624-1643)に徳川家光が、本寺再興のため良材を寄進した折に庭園も改造修補され、その後も、元禄5年(1692)に庭中に銅碑が入れられた時代に、庭園の一部が改造されたとする見解が示されている。従って、今日の庭園意匠については、「古い時代の一二石の保存されたものに對して、後世改造手法を加えたものと云ふことが出来るであらう。」または、

図-1 建長寺庭園平面図

昭和13年4月実測（重森三玲著「日本庭園史圖鑑」より転載し加筆す）

「その局部に鎌倉期の手法を保存するとは言へ、大部分は地割と共に江戸初期の手法となつてゐる。」¹⁷⁾と評価されている。

次に、池泉の形態については、建長寺所蔵の延宝6年(1678)の絵図¹⁸⁾に描かれた池泉地割との比較が行われ、今日の池泉地割が延宝以前に完成していた可能性を指摘している。以上により、本庭は寛永年中(1624-1643)から延宝6年(1678)の間に、ほぼ全面的に改造されたと推定されている。さらに池泉の地割形態については、近年の研究の中で、吉河功による指摘¹⁹⁾に注目される。吉河によれば、現在の池泉の形態は、一種の流水形を象徴した竜池形式であり、石組など現状のほとんどが荒廃または後世の改作であるのに対し、池泉地割にのみ鎌倉形式を示しているとしている²⁰⁾。

以上の先行研究によれば、現在の本庭は江戸初期の様式手法が大部分を占めているとされるが²¹⁾、その一方で、吉河によって、池泉地割の一部に鎌倉時代の形式が残存していることが指摘されている。しかし、庭園の改修状況やその規模については、これまで実証的な研究がなされておらず、さらに改修の際の作者や関係者についても不明とされている²²⁾。

建長寺庭園に関する記録は、室町末期以降の寺勢の衰退により、江戸時代に至るまでほとんど確認されていない。そこで、これまでその荒廃や改築について、具体的な経緯が提示されることはなかった。本論文に取り上げた『再建日記』は、宝暦6年(1756)に上棟した龍王殿の建设工程の他、池泉の埋立てといった庭園改造に関する内容を含んだ記録である。これは、江戸時代の庭園改造の一端をはじめて明らかとする史料であり、次章以降に、その内容分析を行い、現況との対応を述べることにする。

3 江戸時代の建長寺再興と『再建日記』

3.1 建長寺の寺蔵文書

建長寺に伝わる寺蔵文書は、約520点にのぼる²³⁾。数度の回禄や兵火による消滅および寺勢の衰退によって散逸したため、最も栄えた鎌倉時代末期から室町時代にかけての文書は数少ないが、これ

に対して近世の記録は比較的残存している。これらの中には、『福山常住日記』²⁴⁾をはじめ、僧籍帳、末山什物帳、本末帳、および復興期の建造物関係の文書などがみられる。

龍王殿にまつわる文書は、昭和 45 年 (1970) に三浦勝男によりすでに『三浦古文化』8 号中に「鎌倉建長寺近世史料 (一)」として紹介されており²⁵⁾、同誌の中で『方丈并書院普請下行帳』『方丈建立金之簿』『龍王殿再建日記』『方丈玄閣修造金扣牒』『方丈葺替諸雑費』『雲沢菴方丈再建金帳』の全文を掲載している。

3.2 『再建日記』

本論文に取り上げる『再建日記』は、員数一冊、寸法 29.5×21.3cm の寺蔵文書である。表紙および裏表紙の記載事項は以下の通りである。

(表紙)	龍王殿再建日記
(裏表紙)	妙高菴 雪巢西堂 禪居菴 徳牛 普請掛 同契菴 碩英 正統菴 天英西堂 広徳菴 元和

『再建日記』は、次章で詳述するように、寛延 4 年 (1751) から宝暦 6 年 (1756) までの約 5 ヶ年に渡る日記であり、本書の作者や著述年代に関しては、具体的に解明されていないが、永く建長寺に伝来するものであり、1700 年代成立の実用的な性質の記録書と考えられる。

図-2 『再建日記』表紙および本文²⁶⁾

さらに、三浦によって紹介された『再建日記』以外に、宝暦 4 年 (1754) の年号をもつ『再建雑費扣帳』、および宝暦 7 年 (1757) の『再建雑費覚帳』においても築庭に関する記述が確認される。その内容は、以下に示した記述の体裁をとっており、これらは金銭の受渡の収支簿と思われる。

『再建雑費扣帳』原文の一例 (出典:『三浦古文化』9 号)²⁷⁾

- ＜条文-1＞ (宝暦 4 年 2 月釈文)
 - 「一 金貳両三步貳百七拾貳文
土持人足 宝珠下土地江 方丈地形池築土之用」
 - 「一 貳百廿四文
神酒貳舛 地形被始故 四方鎮守献之」
 - 「一 六百七拾貳文
日傭九人 方丈裏地形撞之用」
- ＜条文-2＞ (宝暦 5 年 2 月釈文)
 - 「一 七拾貳文
右左衛門へ遣 紅葉植替の節手伝」
 - 「一 百文
般若湯老樽 紅葉植人足へ下ス」

上記の＜条文-1＞に相当する『再建日記』の記述は、宝暦 4 年 (1754) 2 月 8 日の釈文「一 同八日宝珠菴下之畑て土取始、方

丈地形之初候故四方鎮守并護法、伽藍神江献神酒事」と思われる。同じく、＜条文-2＞は『再建日記』の宝暦 5 年 (1755) 2 月 20 日の釈文「一 同廿日方丈裏紅葉之木植替」に相当している。これにより、『再建日記』の書かれた主旨は、金銭収支より、むしろ、再建工事における人事関係、および、日付を付して作業の進行状況を正確に書き留めることにあったと捉えられよう。このように、同日記は江戸時代における寺院再興の詳細な記録として高く評価されるとともに、近世の作庭の実態を知る上でも重要な史料である。

4 『再建日記』にみる方丈再建と庭園の改築

4.1 再建の工程について

龍王殿は、寛延 4 年 (1751) 6 月 20 日に再建の儀式が行われてから²⁸⁾、約 5 ヶ年の工期で完成した²⁹⁾。さらに造作は宝暦 10 年 (1760) までかかっている³⁰⁾。再建の事業は、寛延 4 年 (1751) 年に没した徳川吉宗葬礼施入残金 40 両を造営基金とし、これに相模、武蔵、房総、下野、上野、甲斐、伊豆などの諸国の末寺勧進を加えて賄われた³¹⁾。再建事業は、徳川幕府による鎌倉再興の一環として、施工は建長寺の直営で行われたが、これにより方丈の規模と格式は、末寺 500 余³²⁾を擁する本山としてふさわしいものに整えられたと言えよう。『再建日記』の基本的な性質については既に述べたが、次に、建築の生産大系と外構計画の関係について、原文の記載に従って整理を行い、その全体構成を明らかにする。

原文の内容は、再建の儀、末寺勧進といった造営基盤の他に、「資材調達」「地業」「木挽」「庭園改築」「普請小屋の建設」「庫裡の建設」「曳家」「方丈の建設」の 8 種類の工種について展開されている。ここで、8 つの工種について、日記に記載された日付と原文³³⁾を抜き出し、工種毎に日を追って原文を示し、整理したものが〔表-1〕(『龍王殿再建日記』における建築・外構計画の構成)である。なお、原文の大部分において、作業動員数の記録、大工等への祝儀の受渡、木材買付のための江戸への出府といった事項に関する記述が見られたが、ここでは方丈再建にともなう造成工事全体を整理し考察するという本論文の第一の目的のために、これを省略して表を作成した。この他、再建工事の主導をとったと思われる大工三左衛門の役割に注目し、庭園改築と何らかの関係があると思われる原文については、これを取り上げ、特別に表中に加えている。

作業全体の流れを概略すると、宝暦 6 年 (1756) 1 月 11 日に方丈の新始之式が行われ、同年 6 月 18 日に建方にかかり、6 月 30 日に上棟式を執行しているが、この間の 3 月 13 日³⁴⁾より 18 日にかけて旧方丈 (聴松軒) を庫裡として隣地へ移築している³⁵⁾。さらに〔表-1〕からは、方丈建設着手に約 2 年先行して、宝暦 4 年 (1754) には、「資材調達³⁶⁾」「地業」「木挽³⁷⁾」「庭園改築」「普請小屋の建設」の 5 つの工種が行われたことが読み取れる。次項以降に、これら 5 つの工種の中から、特に庭園改築とそれに深く関わる地業に注目し分析を行うこととする。また〔表-1〕には、この 2 つの工種に関しては、その全文を掲載した。

4.2 庭園改築に関する分析

庭園改築に関わる地業は、宝暦 4 年 (1754) 2 月 8 日の宝珠庵下³⁸⁾の土手の切り崩し作業から始まり、同年 11 月に入るまで連続して行われている。地業の内容は、掘の開鑿や石垣の築造が主であったが、2 月 28 日に新掘渡について相談の上、広サ五尺長サ九拾貳間、

表-1 『龍王殿再建日記』における建築・外構計画の構成

工種項目	工事相互の関連を示す儀式及び工事期間の関係		
	宝暦4年(1754)	宝暦5年(1755)	宝暦6年(1756)
資材調達	【資材調達始まる】	【山林伐採始まる】	
地業	<p>【地業とその検分】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [2.8] 宝珠庵下之畑どて土取始、方丈地形之初候故四方鎮守并護法 ―― [2.18] 方丈之裏陝二付和尚方へ御内意を窺、蘇碧池六尺通埋事 ―― [2.24] 新堀筋縄張和尚方御見分相済 ―― [2.26] 宝珠庵下土手土取相済 ―― [2.28] 新堀渡之相談、広サ五尺長サ九拾貳間、深サ水流候様二致、良日吉日故受取者共銀入致候 ―― [2.29] 宝珠庵下之畑土取之場所見分、次二千手堂と宝珠庵山境立合見分之上相定事 ―― [3.1] 新堀取掛ル ―― [3.12] 新道作始 ―― [3.23] 是迄新堀相済 ―― [3.28] 古堀埋始 ―― [4.13] 新堀石垣去月廿八日、築始、崩石を以両側十間余同九日迄卅貳人半二而築支舞 ―― [4.19] 本石二而宝珠庵下、築始 ―― [5.19] 新堀土取掛 ―― [5.20] 石屋築キ掛 ―― [5.26] 宝珠庵下新堀石垣崩石ニテ宝泉・雲外・長寿寺其外若キ衆中ニテ築始 ―― [6.3] 新堀之土方丈庭并唐門外江運 ―― [6.26] 蘇碧池、之水送成、正統庵敷之内新堀開、宝珠下堀筋土運了 ―― [7.12] 石屋方へ新堀筋小堀等迄相支舞 ―― [7.17] 古堀等埋掛ヶ取掛ル ―― [8.5] 方丈腰土手築 ―― [8.14] 土手築了ル ―― [8.28] 池ノ西方土手石垣共二三間余崩 ―― [9.2] 寺中兩人例ノ崩石ヲ出 ―― [9.7] 大雨又石垣六間程崩 ―― [9.24] 石匠ヲ入人足ヲ入堀土手崩し築了 ―― [11月] 新堀石垣之葺人足にて茅を以編之 		
木挽	<p>【木挽】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [4.1] 室中板之欄木挽貳人二而挽始 	<ul style="list-style-type: none"> ―― [2.28] 棕欄欄組并木挽始 	<ul style="list-style-type: none"> ―― [1.12] 大工木挽共二細工始ル
庭園改築	<p>【庭園改築】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [6.2] 善右衛門へ申付長廊下口大杉、伐り始 ―― [6.3] 築山ノ大榎共伐始、右左エ門へ申付 	<ul style="list-style-type: none"> ―― [2.20] 方丈裏紅葉之木植替 ―― [6.26] 千手堂後の松木切 	
普請小屋建設	<p>【普請小屋】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [6.26] 小屋地取定 ―― [6.28] 小屋板立 ―― [7.11] 小屋葺下地、三日葺始 	<ul style="list-style-type: none"> ―― [3月] 小屋茅調 ―― [4月] 小屋木伐、第二之小屋企 ―― [4.11] 小屋立 ―― [4.13] 小屋蓋了 ―― [8月] 材木小屋九間二五間二立ッ 	
庫裡の建設			<p>【庫裡】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [2.8] 材木調并庫裡取支舞之相談一山衆議 ―― [2.12] 屋根毀初 ―― [2.15] 崩始 ―― [2.19] 三浦茅出シ初 ―― [2.20] 地形初 ―― [2.29] 地形大半相済 ―― [3.2] 地形築初ル ―― [3.3] 礎穴築始 ―― [4.27] 庫裡火戸大釜土築始ム、雪隠地形成
曳屋			<p>【曳屋】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [2.12] 小屋并唐門ヲ曳ク ―― [3.13] 方丈ヲ拽始メ
方丈の建設			<p>【方丈】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [4.12] 小屋組相済 ―― [4.13] 地形相始 ―― [4.27] 地形漸相済ム ―― [4.29] 方丈地組始ム ―― [6.13] 立柱祈禱、於地形金剛經以楞嚴咒行道 ―― [6.13] 地割水蓋相済 ―― [6.14] 石撞 ―― [6.18] 立テ始ム ―― [6.30] 架梁之祝儀 ―― [7.3] 筑波屋祿師葺始
大工三左衛門	<p>【大工三左衛門】</p> <ul style="list-style-type: none"> ―― [5.26] 大工三左衛門方丈地図書始 		<ul style="list-style-type: none"> ―― [1.7] 釘始ノ相談 ―― [1.11] 新始之式取行

註：表中「工種項目」の分類にあたっては、原文に記された日時に従い、これを分類した。

深サ水流候様二致」と決議しており、6月26日に蕪碧池から送水した経緯が記録されている。以上から、一連の工事の初期の段階において、池の水流の改善が計られたものと推察される。

宝珠庵下の土手土の用途については、先の3.2項に取り上げた『再建雑費扣帳』の原文「方丈地形池築土之用」（宝暦4年2月）を参考にすれば、方丈の土台を築くためと、池の埋め立ての2点であり、この原文からも宝暦再建時の池の埋立てが裏付けられる。蕪碧池の埋め立ては、宝暦の庭園改築の中でも最大の変更点であったが、その採決に至る経緯については、「方丈之裏陝二付和尚方へ御内意を窺蕪碧池六尺通埋事」（宝暦4年2月18日釈文）と記録されている。原文の内容により蕪碧池の縮小規模の推定が可能であるが、この点については「図-1」中、池泉の左方南岸が、方丈とほぼ平行した直線的な形態であることに合致している。図中の直線部分（「図-1」A領域）が、釈文中に六尺通埋めたとされる池泉の一部分を具体的に指すものとして、当時の改築部分に該当する可能性が高いと考えられる。

池泉の縮小のように、大掛かりな土木工事をともなう庭園改築の他、原文には以下の記述が確認される。

「善右衛門へ申付長廊下口大杉⁶伐り始」（宝暦4年6月2日釈文）

「築山ノ大榎共伐始、右左エ門へ申付」（同月3日釈文）

「方丈裏紅葉之木植替」（宝暦5年2月20日釈文）

「千手堂後の松木切」（同年6月26日釈文）

以上の原文から、『再建日記』には、蕪碧池の埋め立てによる池泉の地割変更と、庭園樹木の伐採や配植変更を除いては、庭園改築に関する内容は含まれていないことが確認される。

ここで、庭園樹木の伐採に関して、上記（宝暦4年6月3日釈文）「築山ノ大榎共伐始」を取り上げ、原文中の「築山」の位置について分析することとする。今日の築山の位置は、「図-1」によって、池泉の対岸の中央部（「図-1」B領域）に確認される。『再建日記』中、「築山」という用語は他の箇所には出てこないが、一般に、築山は庭園の主景として重要な観賞対象として知られている。「築山」とは、古くは庭園の景として土を盛って造られた山の総称として用いられていたものであるが、江戸時代に入ると「築山」の語が同時に庭園を意味するようにもなったとされ³⁹⁾、この時代には『築山庭造伝』と題される秘伝書も刊行された。以上の「築山」の用法によれば、『再建日記』中の「築山」とは、実際の山畔を利用して造られた小高い山の呼称ではなく、庭園全体を指した広範囲の意味ととれよう。従って、原文中の大榎（トマツ）は方丈の近景にあった為に、池泉前方の埋立てに際して、初期段階での伐採を余儀なくされたとの推測ができる。しかし、主景となる築山の改築が行われなかったのであれば、実際の築山意匠の変更の時期について明確にする必要がある。5章においてその考察を行う。

4.3 庭園改築の造営主体となる大工の役割

『再建日記』には、「大工三左衛門方丈地図書始」⁴⁰⁾とした原文が見られ、これに続き、「善右衛門へ申付長廊下口大杉⁶伐り始」⁴¹⁾、「築山ノ大榎共伐始、右左エ門へ申付」⁴²⁾、「蕪碧池⁶之水送成、正統庵敷之内新堀開、宝珠下堀筋土運了、小屋地取定」⁴³⁾といった庭園改築にかかわる一連の工程が、短期間の内に連続して行われた様子が窺える。すなわち、ここに出てくる「方丈地図」とは、以後の配置外構計画を指示するのに十分な性質を備えた地図であり、現在の配置図に相当する図面であったと考えられる。樹木の伐採を

行った善右衛門や右左エ門については、庭師であるのか大工の手代であるのかは定かでないが、宝暦の再建事業全般を通して、庭師の名前は出てこない。これに対して大工三左衛門は、地図の作成も行っており、庭園改築の初期の計画段階においてかわりがみられた。以上のことは、これまであまり知られていない領域における大工の職能の一端を示すものである。

5 まとめ

以上の『再建日記』の分析によって、宝暦6年（1756）に上棟した龍王殿の再建事業に際して、池の埋立てが行われた点と、大工の職能の中に庭園改築に関わる性質が認められた点の2点が明らかとなった。しかし、宝暦の庭園改築が、当時の庭園意匠を大きく変更するような全面的な規模で行われたのか、あるいは池泉の南岸を埋め立てたに過ぎない局所的な性質のものであったのかについては、現段階では判定できない。そこで、『再建日記』以外の諸記録も含めた分析を行い、龍王殿再建の庭園改築史上における位置付けを明確にすることとしたい。

前述の4.2項において、龍王殿再建時には、築山の改築は行われなかったとの結論を導いているが、築山の改築に関しては、後年に書かれた『福山常住日記』⁴⁴⁾の原文内容に確認することができる。これによれば、明和6年（1769）3月7日「方丈築山の修築を始め」翌月4月10日「方丈築山茂出来上り候、庭開」、翌日4月11日「宗庭方へ為礼銀子貳枚」と記録されている。このことから、築山意匠の変更の時期は、明和6年（1769）であるとの推察ができる。また、「宗庭」とは、庭師の雅号であるのかは明らかではないが、高額の謝礼に相当する肩書きの人物であったと思われる。

ここで、江戸時代に行われた方丈再建と庭園改築の歴史をもう一度整理してみると、方丈については寛永期と宝暦期の再建工事と、元禄期にも地業を行う大規模な工事が先学により指摘されており、一方の庭園は、寛永年間の改造、および元禄期に園内に銅碑が入れられた際の改築が主なものとされてきた。しかし、本論文によって、従来の説の改築年代に加え、新たに宝暦の池泉埋め立てと、明和の築山改築の存在が明らかとなった。これにより、江戸時代後期における庭園改築の概要が明らかになり、また、この時代の改築の内容が現在の景観を形成する要因となったと考えられる。

築山部分に関しては、庭園意匠上の評価に言われているように⁴⁵⁾、鎌倉期の手法が残されているのは、築山の三尊石組の中尊石、下部の三尺三寸高の石などである。こうした個々の石について、また、池泉の護岸石組みについて、古い手法と新しい改修を認識することによって、各時代における改築の規模や内容、さらに改築の意図が明らかにされると思われる。

以上、宝暦再建の庭園改築史上の位置付けについて述べてきたが、次に、再建事業全体における改築内容の位置付けについて述べる。蕪碧池の南岸の部分的埋め立ては、方丈建設着手に約2年先行して行われ、地業に関する一連の作業工程の中に確認された。先学によって、再建された方丈は相当な規模のものと推測されているが⁴⁶⁾、このことから、方丈の規模拡大による庭の専有面積の縮小にともなう措置であったとも考えられる。その他の改築点は、植物の植替や伐採などの簡易な変更であり、庭園のほぼ一帯にわたる全面的な改築ではなく、池泉南岸の埋立てを中心とした部分的改築が行われた。

水流の改善などの一連の土木系工事については、庭師の名前は見られないが、その計画の初期の段階においては、大工三左衛門のかかりが認められ、「建設工事の一部」としての性格を表わしている。

以上をまとめとするが、最後に今後の課題について述べたい。庭園の発達史と方丈建築の発達史を考える上で、本庭は重要な位置にあると思われる。中世寺院境内の庭園改築の実例は、築庭資料の現存する寺院数が少なく、作庭法の具体については未だ詳細が明らかとされていない。本論文は、宝暦年間に行われた建長寺方丈の庭園改築を通じて、中世寺院が近世寺院へと移行していく過渡期的性質を論じた。その特徴は、中世的空間から、定型化した広縁付六間取方丈に付属する小規模庭園へと急速の変化が望まれたことにある。こうした近世における建築改造にともなう庭園改築の場合の、大工と庭師との関係については今後の比較研究による考察課題としたい。

本研究をまとめるにあたり、工学院大学後藤治助教授、国立科学博物館理工学研究部清水慶一室長、(社)海外鉄道技術協力協会小野田滋氏より御教示を賜りました。ならびに、建長寺にまつわる近世史料の所蔵の状況につきましては、華厳学研究所小島岱山所長、鎌倉古文書研究会の三淵美恵子氏より多くの御教示をいただきました。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

【本文註】

- 文献2に掲載されている昭和13年4月実測の建長寺庭園平面図中には、面積を約600坪と記載している。なお、図中の池泉の右手方向に伸びている部分に関しては現在は見られないとしている。
- 文献6,p.194によれば、この図は京都東福寺工匠越後縁の家に秘蔵されていた建長寺指図を享保17年(1732)東福寺に挂錫した建長寺の僧が衣財を喜捨して模写し、箱に収めて永く西来庵の鎮宝としたものであるが、その原因の制作年代は元弘元年(1331)と推定されている。
- 文献2,p.43「寛永年中、家光の本寺再興当時於て、聴松院後庭たる蕪碧池の庭も改造され、それが今日大体の姿として保存され、更に後世これが又々荒廃しつつある處である。」に基づく。
- 文献2,p.42。
- 文献10。
- 文献15。
- 文献9、文献16、文献18。
- 文献16,p.182によれば、図107「現況と発掘区と指図の対比合成図」として、指図に現状図を重ね合わせ、発掘結果との比較を掲載している。また、関口欣也氏によって、このような苑池は南宋五山には見られず、建長寺の顕著な特色であることが指摘されている(文献17,p.76)。
- 蕪碧池の呼称は、たとえば建長寺第23世住持の明極楚俊によって元徳2年(1330)から元弘元年(1331)に著された「題建長寺十境」中にみることができる。(引用は文献1,p.49および文献3に基づく)
- 文献6,p.195の掲載図参照。
- 文献6,p.198。
- 「鎌倉志」にも、「書院聴松軒と名く」とその名は記されている。
- 文献4,p.72によれば、祐之地震記に「方丈は傾損したれとも、顛倒せず。」のような被害の状況が記されている。また、同資料は方丈の庭に仮屋を建て人々が避難していた様子を伝えている。
- 文献17,p.159。
- 重森三玲(1896~1975)は、昭和時代を代表する日本庭園の研究家であり作家。「日本庭園史圖鑑」をはじめとし数々の著作と、百数十にも及ぶ庭園を手掛け、日本庭園の実地的様式研究の先駆となった。
- 文献2,p.43によれば、昭和13年の調査において、池泉の底土に埴土が敷きつめられていたことが認められた。これにより池泉底部に鎌倉時代の構造が残されていると述べている。
- 文献2,p.42。
- この古図には、聴松軒とその庭が描かれているが、池泉の地割は今日と変わりなく描かれている。図中には蕪碧池の名が記され、他に霊松、石碑跡などが庭園内に存在している。
- 文献12,p.53による。
- ただし例外的に、正面の対岸にある低い築山部に見られる石組に道隆時代の面影を残しており、当初はここが枯滝として表現されていたと述べている。さらに、建物の真正面に滝石組を作る様式は、天竜寺庭園、東光寺庭園などと共に道隆式であり、他にほとんど例がない点を指摘している。蘭溪道隆は建長5年(1253)に建長寺の開山となったが、後に京都建仁寺に入り、後嵯峨上皇の仙洞龜山御所に招かれ禪を説いたが、この活躍に反発した旧仏教からの流言にあい、文永5年(1268)に甲州に入った。そこで、本庭は甲州に至る以前に作庭されたと推定されている。道隆式とは、蘭溪道隆とそ一派による作風を指して用いられる。蘭溪と作庭の関係については未だ不明なところが多い(文献13による)。
- 文献7,p.36によれば、例えば、蓬萊石の前に三尺の立石を用いるのは、まだ桃山期の伝統が残されている寛永初年頃の手法をよく示すものであり、その他、鶴島の意匠などにも江戸初期の手法が見られるとしている。
- 文献7,p.35。
- 文献11による。
- 『福山常住日記』は『参暇日記』ともいい、元禄を上限とする建長寺蔵の寺務日誌である。
- 文献5による。
- 文献5より引用転載。
- 『三浦古文化』9号に「鎌倉建長寺近世史料(二)」として紹介された。
- 関口欣也によって以下が指摘されている。寛延4年6月20日釈文「有徳院様御他界被遊候二付如先例納経拝礼相済、御施物三百貫文被下置難用指引残金四拾両有之、満山衆評之上右四拾両を以致台金方丈再建之義相極」により、龍王殿再建の発端は、寛延4年(1751)6月20日に没した徳川吉宗葬礼の施物残金40両を台金とする再建決議によって始められたことが明らかとされる。
- 宝暦6年(1756)8月9日の普請奉行退役までの約5ヶ年を要した。
- 関口欣也によって以下が指摘されている。龍王殿落成の翌年正月の下行にはじまる『再建雑費覚帳』によって、方丈・庫裡の造作工事の内容が知られる。それによれば、外構の雨落石敷・縁板・立具・仏壇・天井・欄間・天井・立具の縁塗・内廻障子・新畳などの造作下行がみられ、宝暦10年5月をもって造作の完成としている。
- 関口欣也によって以下が指摘されている。宝暦3年8月1日釈文に、宝暦3年8月に三浦房州筋・津久井甲州筋・立川五ヶ市日影筋・中郡豆州筋・秩父足利白河筋の5筋に分けて、末寺勧進が行われ、九月末までに帳面金609両を得たことが記されている。
- 文献16,p.182による。
- 原文は三浦勝男によって『三浦古文化』8号に紹介された解釈に従う。
- 宝暦6年3月13日釈文「十三日方丈ヲ搜始メ」による。
- 宝暦6年3月18日釈文「十八日二谷殿首尾能庫裡坐江被掃申候、少々柱根傷二候得共先ツく一箇ノ怪我無了落坐」による。
- 関口欣也によって以下が指摘されている。資材の調達は、鶴岡八幡宮の残木を払受けたことにはじまり、大材は江戸の材木屋で買い求め、舟で坂ノ下につけ人足に運ばせていたことが知られる。さらに江戸材木買入と平行して鎌倉内での材木伐採と木挽が行われていた。
- 宝暦4年4月1日釈文「室中板之槻木挽式人二而挽始」により、再建事業の早期の段階で室中板の製作に着手していたことが窺える。
- 宝珠庵は、建長寺の塔頭寺院の一つであり、龍王殿の西北の支谷に建ち、現在も同位置に確認することができる。
- 日本庭園研究会編「庭園・植栽用語辞典」、井上書院、2000年発行による。
- 宝暦4年5月26日釈文。
- 同年6月2日釈文。
- 同月3日釈文。
- 地業の項目中、同月26日釈文。
- 原文の引用は文献14,p.119に基づく。
- 文献7,p.36。
- 関口欣也によって以下が指摘されている。釈文中には、七寸角の柱20本、三間差鴨居1本、四間差鴨居2本などの記述が見られることから、再建された方丈は相当な規模であったと推測されている。

【参考文献】

- 新編鎌倉史 大日本地誌大系 第19巻、雄山閣、1934
- 重森三玲：日本庭園史圖鑑 第24巻、有光社、1936
- 鎌倉市史編纂委員会：鎌倉市史一史料編、鎌倉市、1937
- 梨本祐之：祐之地震日記 神奈川県文化財調査報告 第19集 神奈川県教育委員会、1953
- 三浦古文化研究会：三浦古文化 第8号、1970
- 神奈川県教育庁指導部文化財保護課：神奈川県文化財図鑑・建造物篇 神奈川県教育委員会、1971
- 重森三玲・重森完途：日本庭園史大系 第18巻、社会思想社、1974
- 山本榮吾：建長寺創営私疑、日本建築学会大会梗概集(東海)、pp.1685~1686、1976.10
- 鎌倉市教育委員会：鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 昭和46年度~52年度、1977
- 櫻井敏雄：建長寺伽藍の設計計画について一元弘元年の指図を中心として、日本建築学会計画系論文報告集 No.350、pp.95~105、1985.4
- 鎌倉市教育委員会：鎌倉市文化財総合目録(古文書・典籍・民俗編)、同朋舎出版、1985
- 吉河功：禅寺の庭 グラフィック社、1991
- 吉河功：日本庭園人物誌 日本庭園研究会出版部、1993
- 三浦勝男：鎌倉志料 第6巻、鎌倉国宝館、1994
- 武内正和：建長寺方丈について、日本建築学会大会梗概集(北海道)、pp.255~256、1995.8
- 鎌倉市教育委員会：建長寺境内遺跡・昭和61年報告、鎌倉の発掘10 新人物往来社、1996
- 関口欣也：鎌倉の古建築 有隣新書、1997
- 鎌倉市史編纂委員会：亀ヶ谷坂周辺詳細分布調査報告書、1998

(2002年1月10日原稿受理、2002年7月1日採用決定)